

高大連携した「総合的な探究」の時間における哲学対話

The Practice of Philosophical Dialogue in ‘Inquiry-Based Integrated Studies Classes’:
Promoting Cooperation between High Schools and Universities”

奇二 正彦（立教大学スポーツウエルネス学部）
河野 哲也（立教大学文学部）

1 高大連携授業と哲学対話

立教大学文学部では、岩手県立高田高校と連携して、高校2年生の「総合的な探究」の時間と基幹科目「SDGs フィールドワーク」を一体化させた高大連携の合同授業を、2021年度から実施してきた。2021年と2022年はコロナ禍の影響により、当初に予定していた形での授業を行うことに困難があったが、2023年と特に2024年に関しては、計画通りの形で高大連携授業を実施できた。当授業は、SDGsをテーマとした高校生の「探究」学習を、大学生が支援し、最終的に陸前高田市において探究の成果を公開発表することを目的としている。この授業において重要な方法として哲学対話を導入したので、これを報告する。

2 高大連携と教育目的

立教学院は、2003年から正課外教育プログラムとして、岩手県陸前高田市生出地区にある「ホロタイの郷『炭の家』」での林業体験学習を通して、同市と友好関係を深めてきた。東日本大震災発生を受け、津波により甚大な被害を受けた同市に対して、立教学院は全学的な復興支援に取り組み、2017年4月には岩手大学と協働で交流活動拠点「陸前高田グローバルキャンパス」を開設し、多様な教育プログラムを実施した。

自然災害は、過疎化や高齢化、人口流出、産業縮小など、もともと地方に存在していた問題を加速させる。陸前高田市においても同様のことが指摘できる⁽¹⁾。2021年には震災発生から10年を過ぎて震災復興事業が一段落し、「復興」を超えた地域創生のための新しい企てが求められる。これまでの日本の地方創生事業はしばしば地域住民の意向を十分に反映できず、豊かな自然の喪失、地域文化の衰退、他地域からの孤立、世代継承の消失などの問題を解決できずにいた⁽²⁾。地方創生で何より重要なのは地域住民による自発的参画である。地域創生教育でも、当事者として自分の地域の諸課題に向かい合う姿勢を育むように、当該の地域の若者たちの主体性を尊重する必要がある。

そこで、「SDGs フィールドワーク」では、高田高校2年生約50名が履修する「総合的な探究」の時間と連携し、大学生が高校生の探究活動を支援し、その成果を市民に公開する授業を実施した。いわば、大学生がファシリテータとなり、高校生の探究を導くのである。これにより、高校生は、大学生の支援のもとで探究をより高度なものへと発展させることができ、大学生の方も、指導経験を通して地方の実情、地域創生の理念とあるべき方法について学べる機会を得られる。立教大学と高田高校のように、一貫校でも連携校でもない二つの学校が連携して授業を行うことは全国的に見ても稀であろう。報告者たちは、

この授業が、大学が教育を通して地域に貢献するあり方の一例となることを望んでいる。

また、高田高校は、被災地復興への生徒の主体的な取り組みを目指す「T×ACTION」というプログラム名で、三菱みらい育成財団の2021～23年の助成を受けている⁽³⁾。

3 授業の方法と形態

当該科目の目的は、「生態学的自然と人間の歴史・文化・産業を理解し、グローバルな視点からその地域を捉え直し、SDGsの目標に即した持続可能な社会を構築していくための課題と方法を体験的に理解すると同時に、ESD(環境教育)的な視座を獲得する」ことにある。

授業の方法としては、具体的に、ZOOMを利用したオンラインでの高校大学共同の事前学習を経て、3泊4日程度の現地調査を行い、最終日に陸前高田市で公開の成果発表を行うものであり、大学生は、現地調査後に個々人が最終レポートを作成する。以下に、主に、2024年度の授業実施について報告する。

スケジュール：以下の表のようになる。オンラインでの事前学習会は、大学は1時限分、高校は2時限分を用いた。4月の第一回の事前学習会の前に高校生の探究課題の希望を取り、高校側にはグループ分けしておいてもらい、大学生をそのグループに割り当てた。

日 時	方 法	内 容
4/30	オンライン	事前学習会①：ガイダンス、講義「土地の価値の見つけ方」
5/14	オンライン	事前学習会②：講義「対話と探究の方法」、グループ作り
6/18	オンライン	事前学習会③：テーマと問いの探究、調査法の相談
7/23	オンライン	事前学習会④：調査と探究の進展
8/29	対面	移動～M・フランコ氏講演と哲学対話
8/30	対面	現地調査と発表準備①：フィールドワークと調査まとめ
8/31	対面	現地調査と発表準備②：調査まとめと資料作り
9/1	対面	公開プレゼンテーションとポスター発表
9/26	対面	事後学習会（大学生のみ）

探究活動と大学生の役割：

高校生約50名は、探究のテーマに沿って以下のようなグループを作り（各グループ6～8名程度）、そこに1～2名の大学生がファシリテータとして加わり、探究の指導や支援を行う。大学の教員は、フィールドワークの方法、インタビューやアンケート調査の方法、対話の方法などを学生に教授しておいた⁽⁴⁾。

高校生はオンライン上で、グループに分かれて、担当の大学生とディスカッションしながら、関連文献を調査・読解し、テーマから問いを導き出し、何を探究し、どのような提案を市に対して行うのかを探究した。大学生は、高校生に対して、テーマと問いの設定、関連論文の読解と分析、調査の仕方と作法、調査結果のまとめ方、発表用の資料やパワーポイント作り、発表中の態度、ポスター作成などを指導した。

大学生と高校生、高校教員、大学教員間は、SlackやLineといったSNSを用いて緊密に連絡を取り合った。授業時間内で終わらなかった作業は、時間制限をもうけて、大学生と高校生間で申し合わせて完了させるようにした。高校生と大学生では、デジタル機器の活用や情報収集力に大きな力の差があり、それを埋める作業も必要であった。

それぞれのグループのテーマと探究の趣旨は以下の表のようになる。

テーマ	趣 旨
まちづくり（文化）	まちおこしのために、伝統的な高田の祭りを紹介する
まちづくり（環境）	人口減少に対処するための生活環境の改善
スポーツ	地域活性化を目指した小学生のための新たなスポーツモデル
心理・ジェンダー	地域の人の情報源と考え方について
医療・福祉	子どもたちを主な対象として医療職に興味を持ってもらう方策
介護・リハビリ	幅広い年代の人々と交流しながら行う介護やリハビリ
産業	第一次産業の担い手不足の改善方法

大学生が陸前高田市を訪問した8月末の3日間では、大学生と高校生が共同して、各関連施設や職場を訪問し、インタビューを中心とした現地調査を行った。テーマに即して、高田高校の教師が市内の施設や職場、人物を生徒学生に紹介した。

授業の特徴：

本授業において重視したのは次の二点である。第一に、高校生に対して、「地域の価値の再発見」を求めたことである。筆者のひとは環境教育を専門とするが、しばしば地方の若者においては価値観が都会志向に傾きがちであり、地方創生という、その地域の欠点を指摘することが多い。地方には、その地域にしかない自然や歴史、文化があり、それらのポジティブな価値を活かし、伸ばさせることが地域創生には欠かせない。そのため、本授業では、自然環境や文化的背景の多層的な側面を探究することに重きを置いた。地域の価値は、水文、地質、気候などの地学的環境を基盤としている。これは自然の地形の特徴として表れる。例えば、陸前高田市においても特有の地学的環境が見られ、その上に生物学的環境と人文的環境が重層的に存在している。

生物学的環境は、地形や気候の影響を強く受ける。例えば山の植生も、北斜面と南斜面で異なるゆえ、植物を消費する動物の種類も自ずと異なってくる。さらに細かく見れば、同じ斜面内でも尾根と谷で全く環境が異なる。地学的環境の上には、生物学的環境に加えて人文的環境がある。後者には人の作ったダム、住宅街、道路などの「見える部分」と、神話、詩歌、方言などの「見えない文化」が含まれ、すべてが合わさって地域の風土を形成している。本授業では、多層的な環境を理解し、地域の価値が動的に変化する視点を提供した。

第二に、その地域の価値を再発見するには、外部からその地域を見直すことが必要とされる。いわば、「よそ者」の視点こそが、自明視されて見逃されがちな地域の「価値」を再発見するのに重要である。移住組、Uターン者もその中に入るだろうが、首都圏出身者が多い立教大学の学生との交流もそうした視点をもたらしてくれるだろう。しかし、とりわ



気仙大工左官伝承館



高校生と対話するフランコ氏

け異質で新鮮な視点で地域を見出せるのは、海外からの滞在者だろう。「よそ者」の視点を取り入れることができるのは、その人たちとの深い対話である。

今回の授業では、立教大学に招聘研究のために訪れていたブラジルのリオ・グランデ・ド・ノルテ国立大学健康学部講師のマルセル・アルブス・フランコ（Marcel Alves Franco）氏に、陸前高田市での授業に同伴してもらい、SDGs の健康と環境問題に関わる「身体実践、自然、持続可能性の美的経験」という講演を行ってもらい、その後、高校生とそのテーマに関する哲学対話に加わってもらった。この講演の翻訳と通訳は、高校生が行った。

プレゼンテーションとポスター発表：

以上の探究学習の成果として、最終日の午前中には、陸前高田市民文化会館「奇跡の一本松ホール」でプレゼンテーションが行われ、昼の時間帯での「アバッセたかた」（市の中心にある市立図書館とショッピングモールが併設した建物）の入り口の開けた空間でポスター発表が行われた。プレゼンには、生徒の保護者や一般市民の方にも参加していただき、1 グループ 15 分で 7 グループ、パワーポイントを使った発表が行われ、それぞれの発表に対して会場と質疑応答が行われた。最後に、大学教員から講評がなされた。

ポスター発表は日曜日の昼食時間 1 時間半を使って行われた。市内外からモールや図書館を訪れた非常に多くの人が立ち止まって、高校生大学生との質疑応答に応じてくれた。発表に関するアンケートも行われ、もっとも好評だった 3 グループが表彰された。アンケートは 100 枚近く集まり、予想以上の市民の反応に、高校生たちは大変に熱心に応じていた。ポスターの聴衆には、高校生のアイデアに感心しながらも、現実的な問題について質問をする方もあり、高校生も大学生も、自分たちのアイデアの実現可能性について反省する機会を得られた。

大学生たちは、地域の高校生がこうした取り組みを行い、アイデアを発信することは、まちを刺激するきっかけにもなり、少しでも実際に何か実行されて活性化につながると感じていたようである。各グループは文献調査とフィールド調査をしっかりと行い、発表にそれが表れていた。特に表現力の高い生徒たちは、抑揚や間を駆使して聴衆を惹きつけ、スライドも理解しやすくデザインされていた。印象に残ったのは、ジムなどの施設ではなく自然を活用して子どもたちに運動を促すという「スポーツと教育」のチームであり、発想力が素晴らしかった。

ポスターセッションでは、高校生たちが積極的に声をかけ、スマホが電子掲示板になるアプリを使って発表テーマを広報する班や、素朴に大声でアナウンスすることで注目を集める班など、エネルギッシュな姿が印象的だった。一般の方からの関心も高く、質疑応答を通して現実的な問題や更に野心的なアイデアの必要性についての意見が飛び交った。陸前高田で生まれ育った高校生たちがこの地域課題を切実に捉え、まちの活性化に繋がたいと考えている姿は、まさに地域愛に溢れていた。



高校生のプレゼンテーション



大盛況のポスター発表会場

4 実践と合意形成に導く哲学対話

以上の授業の中で、「哲学対話」がいくつかの局面で用いられた。第一に、テーマから問いを立てる段階で、これまでありがちな「町おこし」の模倣にならないように、まず、高校生にとってこの町の将来がどのようにあってほしいかについて、根本に立ち返って議論してもらった。この対話は、最初段階だけでなく、調査が進んだ段階でも、いくどもテーマに立ち返って哲学的な議論をするようにした。第二に、フランコ氏の講演をテーマとして、大学生と高校生が合同で哲学対話を行った。ブラジルという日本から遠く離れた場所と比較しながら陸前高田と日本をまなざすフランコ氏の講演と彼との対話は、「驚き」から開始されると言われる哲学的思考にとって絶好の機会となったであろう。

先に述べたように、地域創生は、当該の地域に十分に親しみながらも、それを新しい眼で、驚きを持って再発見することから始めなければならない。自明視されたものを改めて検討し、常識を問い直すのが哲学であるとすれば、地方創生には哲学的な視点は欠かせない。そして、その視点は、まさしく「よそ者」と共に、その地域について語り合おうとする対話によって得られるのではないだろうか。

したがって、地域創生のための総合的な探究の授業として、「地域フィールドワーク」と「対話」、そして「プラン作成と実行」を含んだ、次のような提案ができる。まず、児童生徒が、環境ガイドの導きや「よそ者」との交流を通して、地域の履歴を知る「地域フィールドワーク」を行う。「地域フィールドワーク」とは、参加者が、その地域の「空間の履歴」(桑子敏雄)を自然的・歴史文化的に理解することである⁽⁵⁾。フィールドワークを通して地域の価値を再発見した上で、地域が抱える問題や今後育むべき価値や将来のビジョンについて、根本的なレベルまで掘り下げて、時間をかけてじっくりと「対話」する。対話では、若者同士の議論が最も大切であるが、そこに同等の資格の対話者として大人が議論に参加するのも構わない。ここでは、哲学対話や子どものための哲学の方法が活かされる。

従来、哲学対話は、簡単に結論を得ようとせずに、根本的なレベルで深い思考を耕す知的探求の過程であるとされてきた。もちろん、筆者たちもそのことに異存はないが、他方で、対話で生じてきたアイデアを実現可能なプランへと導き、それを実行するという別の行程があってもよいのではないだろうか。価値についての対話は、参加同士に深い相互理解をもたらすだろう。そのような過程の中で醸成された合意と相互信頼に基づいた事業計画は、表面的な議論にとどまることによって生じていた誤解や不信を乗り越える可能性があるのは、やはり桑子敏雄の「談義」の実践が示す通りである⁽⁶⁾。地域創生のための総合的な探究の時間のモデルはここにあるといってよいだろう。

地域の価値は、大地そのものの履歴に深く根ざしている。地質や水文、気候といった地学的環境が地域の基盤となり、そこから長い時間をかけて生物学的環境、さらに人文的環境が重層的に重なっている。これらは互いに作用し合い、時間をかけて地域ならではの特徴を生み出す。地域創生が都市化や画一的な発展と同一視されれば、地域の貴重な個性が失われる危険性もある。本来は豊かな価値に満ちているにもかかわらず、自分の故郷をあたかも貧しい場所と誤解してしまうこともある。しかし、地域の価値を掘り起こす体験とそれを語り合う深い対話を通じて、その土地に生きる者たちは自分たちの地域に誇りと愛着を感じ、そこにある良さに気づくことができるだろう。この体験と対話の両輪に基づ

いた気づきがあるからこそ、課題に対して切実に向き合あうことができるのである。

【註】

- (1) 陸前高田市ウェブページ: <https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/soshiki/shiminka/torokugakari/8/jinkousetaisuu/index.html>
- (2) Cf. 鈴木敏正他(2014)『環境教育と開発教育：実践的統一への展望、ポスト 2015 の ESD へ』筑摩書房; 袖井孝子編著(2016)『「地域創生」へのまちづくり・ひとづくり』ミネルヴァ書房.
- (3) 一般社団法人三菱みらい育成財団 HP: <https://www.mmfe.or.jp/partners/606/>
- (4) 以下の著作を参考文献とした。阿部治・増田直広(2020)『ESD の地域創生力と自然学校: 持続可能な地域をつくる人を育てる』ナカニシヤ書店; 小熊英二(2019)『地域をまわって考えたこと』東京書籍; 河野哲也(2021)『問う方法・考える方法: 「探究型の学習」のために』ちくまプリマー新書; Think the Earth(2018)『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』紀伊國屋書店.
- (5) 桑子敏雄(2009)『空間の履歴』東信堂.
- (6) 桑子敏雄(2016)『社会的合意形成のプロジェクトマネジメント』コロナ社.